

沼津市若山牧水記念館

第31号

2003.9.25

編集・発行
〒410-0849

社団法人 沼津牧水会
沼津市千本郷林1907-11

TEL・FAX (055) 962-0424
http://web.thn.jp/bokusui/

駿河なる沼津より見ればふじがねの
まへに垣なせるあしたかの山 牧水



牧水は大正九年八月十五日に沼津に移住。この歌は、その年の秋、ようやく少し落ちついて来た頃の作品で、『くろ土』所収。「雑詠」と題する連作の第一首である。

牧水はこの歌が気に入っていたらしく、半切や色紙などにもよく書いたが、写真への揮毫は珍しい。よほど良い気分だったに違いない。

大正十二年一月十六日から二月五日まで伊豆土肥温泉に滞在して、『山桜の歌』を整理編集。沼津の千本松原の一角に新居建築を計画、延岡中学の同級生村井武に設計を依頼して次

第に具体的になった頃の三月九日、牧水は『山桜の歌』の原稿を新潮社に渡すため上京、神田通新石町の社友高久耿太の家に一泊した。この写真はその翌朝、朝酒で陶然としている牧水を高久耿太が撮ったもので、牧水三十七歳の顔である。「創作社」の全国大会を沼津で計画、その準備が順調に進み、新居の方向も自分の理想の形で可能になりそうな、そんな満ち足りた思いの表情がここにある。牧水はこの写真がことのほか気に入って、『山桜の歌』の口絵に使った。

この揮毫入りの写真は、当記念館の開館とともに、高橋希人氏から寄贈されたものである。

親友であり社友でもある高橋希人に思いつきのように写真に真筆を飾って贈ったのであろう。ほとんど変色のない保存の良さは氏が大切に持たれていたことの表れだろう。文字は酔いにまかせての一気の書で、まさに牧水らしい書である。この作品は歌集には「駿河なる沼津より見れば富士が嶺の前に垣なせる愛鷹の山」となっている。文字に拘らない牧水らしい書といえようか。

高橋希人氏は明治三十四年神奈川県の生まれで、牧水より十六歳下の若い京大卒の学究の徒であった。創作社への入門は大正六年、後に医学博士、野村證券健康管理センターの所長にもなっている。牧水没後、創作社の選者兼常任編集委員として活躍、歌集に『淡彩』『比黒』『黒づくみ』『白花文』がある。

千本浜公園の第一号牧水歌碑の文字に用いられた「幾山河」の半切や、当記念館に展示してある「牧水最後の手紙」、第二歌集『独り歌へる』も氏からの寄贈である。(須永秀生)

そこに在るものへの愛

『歌集』『山桜の歌』『黒松』の作品

小島 ゆかり

若山牧水は、青春歌篇に大きな花を咲かせた歌人であり、また、かつて伊藤一彦が「あくがれゆく牧水」と名づけたごとくへはるかなものへの憧憬を独特のリリズムで歌った歌人であった。

しかし、牧水の歌の読者としての時間が積み重なるにしたがい、私にはしだいに、最終の二歌集『山桜の歌』『黒松』に見える晩年の花とも言すべき作品群への愛着が生まれてきた。へはるかなものへの憧憬に対して、たとえばへそこに在るものへの愛と呼んでみたいような、やはりまことに牧水的な抒情への愛着が。

山ざくら散りしところ真白くぞ小石かた
まれる岩のくぼみに 『山桜の歌』
石菖の花咲くことを忘れぬきうすみどり
なる石菖の花 『山桜の歌』
鉄瓶のふちに枕しねむたげに徳利かたむく
いざわれも寝む 『山桜の歌』

一首目は有名な「山ざくら」連作二十三首中の作品。伊豆湯ヶ島温泉で三週間滞在して作ったといわれる。



『山桜の歌』初版本

牧水の山桜好きは、「朝地震す空はかすかに風して一山白き山ざくらかな」「山越えて空わたりゆく遠鳴の風ある日なり山ざくら花」など、すでに第一歌集『海の声』の代表歌を生み出していることからもうかがわれるが、薄紅の葉が萌え出てから花が咲き、さらに衰えて散る花、散り残る花までを、濃やかな描写と美しいリズムで歌った連作二十三首は、牧水が陶酔的な旅と酒の歌人ではないことを証すに十分である。そして一連の中にこの一首を見つけたとき、私はまさに真つ白な小石を拾ったような喜びを覚えた。

山桜の花が白く細かく散り溜まっている岩の窪みにかたまっている小石。牧水は、愛する山桜を見るその同じ眼差しで、小石を見る。すると小石はみな、ひそかに息づくようにしてそこに在る。

二首目は、「あくまでも自然に、おまえはそこでこんなにも優しい花を咲かせていたのだなあ……」との石菖への心の語りかけが、そのまま歌のリズムを作り出している。

「湯ヶ島雑詠」の一首。「山ざくら」との心理的つながりで読んでも、関わりなく読んでも、それぞれの味わいがある。

「深夜独酌」の注がある三首目。大好きな酒を入れる徳利へのいとおしみ。微笑ましいまでに「ねむたげ」である。

いずれも、大作や代表作のかたわらにあって、いわば地の歌と呼ぶべき自然さで作られている。これらの作品の前に私は長く立ち止まり、静かな心の憩いを得る。なぜなら、小石も石菖の花も徳利も、まるでここに私が在るように、そこに在るから。

ところで、こうした作品は突然あらわれたわけではない。『海の声』から『別離』までの高揚、『死か芸術か』の葛藤と苦悩、『みなかみ』の深い孤独と寂寥など、いくたびかの大きなうねりを潜りつつ、つまり恋愛や家の問題、また生活や病といった現実が実人生に濃い影を落としてゆく過程と軌を一にしつつ、しだいにゆる



『黒松』初版本

やかに作風が動いていったと考えてよい。
 このことは、牧水の歌のリズムにもおのずから変化をもたらしている。思えば、牧水青春期の作品群には、思いつめたような切迫した高揚したリズムが脈打っていた。たとえば茂吉の粘着のリズム、白秋の感覚のリズムと比較していえば、牧水のそれは直情のリズムと言ったらよい。具体的には、初句切れ、二句切れのストリートな心情表白のスタイルがたいへん多かった。それがやがて、三句切れや読み下しなどの落

ち着いたリズムへと移行してゆく。内容がリズムを作り、リズムが内容を生かすという短詩型の法則はおそらく、天来のものとして牧水の体の中にあつたに違いない。

そして、『山桜の歌』後半から『黒松』にかけては、詩歌総合誌「詩歌時代」発行の失敗による生活の逼迫と体調の悪化など、精神的肉体的ストレスを重く抱えながら、旅にあつて家にあつて、不思議なほど無心な眼差しをもって作品が作られてゆく。

ゆくりなく夏野が原にあらはれし真黒き犬
 は遠くより吠ゆ
 『山桜の歌』

この枯野猪も出でぬか猿もみぬか栗うつく
 しう落ちたまりたり
 『山桜の歌』

ひたひたと土踏み鳴らし真裸足に先生は教
 ふその体操を
 『山桜の歌』

この国の寒さを強み家のうちに馬引き入れ
 て共に寝起す
 『黒松』

群りて逃げて行きしが群りてとどまれる見
 れば鮒の静けさ
 『黒松』

芹の葉の茂みがうへに登りゐてこれの小蟹
 はものたべてをり
 『黒松』

三首目の歌には、「ありとしも思はれぬ処に五戸十戸ほどの村ありてそれぞれに学校を設け子供たちに物教へたり」の詞書がある。大正十一年秋、信州から草津・白根などを経て日光へ至る長旅の途中（「引沼村」と注あり）。

四首目は、「千曲川上流」連作二十五首の第三部「その三、梓山村附近」の一首。

六首目は七月二十九日（昭和三年）と日付のあつて、牧水歌稿ノート末尾の一首。この歌が書かれてからほぼ二ヵ月後に牧水は亡くなり、さらに十年後の昭和十三年に歌集『黒松』が出版されている。

四十代は晩年というには若すぎるが、これらの作品に現れる、犬や栗や寒村の先生、また馬や鮒や小蟹の、なんと豊かにそこに在ることか。牧水は、「へはるかなものへの憧憬」とへそこに在るものへの愛」とを二つながら懐深く育んで生きた歌人であつた。そして、歌うことが生きることであつた牧水にとって、二つはあるいは一つであつたかもしれない。

【筆者プロフィール】
 一九五六年愛知県生まれ。早稲田大学在学中にコスモス短歌会に入会。九三年から二年間の滞米生活を経験。九七年、歌集『へばらい暦』で河野愛子賞、「希望」で若山牧水賞を受賞。歌集はほかに『獅子座流星群』『エトピリカ』などがある。エッセイ集に『蜜の海』『うたの観覧車』など。現在、短大講師や「NHK歌壇」の選者を務める。



香貫山の牧水歌碑

香貫山かぬきやまの香陵台こうりょうだいの一隅に若山牧水の歌碑があるのをご存じでしょうか。

登山道から登ると間もなく開ける香陵台からは、北に富士山、愛鷹山あしたかやまを望み、眼下に沼津の町並みとその中心を蛇行して流れる狩野川かののがわが、



を経て大瀬崎おせざきまでの沼津全体と伊豆の山々をも望むことができる眺望満点の展望台です。散歩やハイキングで訪れる人も多く、沼津市民から親しまれています。

この香陵台に、若山牧水の歌碑があります。

香貫山いたゞきに来て吾子あことあそび

ひさしくをれば富士はれにけり

千本松原の景観に魅せられていた牧水は、大正九年田園生活を求めて東京から一家を挙げて香貫山の麓に移住し、少年のころからの憧れであった海を見ようと、長男の旅人たびりさんを連れて香貫山へ登り、この歌を詠んでいます。

海見ると登る香貫の低山の小松が原ゆ富士のよく見ゆ

低山の香貫に登り真上なるそびゆる富士を見つつ時経ぬ

この二首とともに、「香貫山」と題して第十三歌集『くろ土』に収められています。「八月中旬、東京を引払ひて駿河沼津在なる楊原村香貫山の麓に移住す。歌を詠み始めたは九月半ば

なりけむか」の詞書がついており、沼津へ住んで最初に詠んだ歌です。

故郷の宮崎県東郷町とは異なるものの、山があり、川があり、憧れの海のある沼津をたいへん気に入った牧水は、永住を決意して千本松原の一角に土地を求め、念願の新居を建てました。

沼津での牧水は、詩歌の総合雑誌『詩歌時代』を発行するなど盛んに文学活動を展開する一方、県が計画した千本松原の松樹伐採に反対する自然保護運動の先頭にも立っています。

「香貫山の歌碑」が、沼津商工会議所観光部会によって建てられたのは、牧水の三十三回忌にあたる昭和三十五年九月十七日でした。高さ三メートル、幅七十センチの自然石を平板に仕上げきれいに磨いた面に、牧水の筆跡で先の歌が刻まれています。牧水の孫の榎本篁子むぎこ当館館長は、喜志子夫人の立ち姿を連想させる美しい歌碑だとおっしゃっておられます。

この歌碑も、年月の流れの中で、周りの樹木が大きくなり、すべり台の陰にもなって、見えにくく残念だとの声が出ていました。

うれしいことに、沼津市教育委員会のお骨折りで、沼津香陵ライオンズクラブが市制八十周年記念の第一回沼津文学祭に協賛し、牧水没後七十五年の今年九月十七日、牧水が立ったであろうと思われる見晴らしのよい場所に移設してくださいました。

(真木美紗子)